

「世界最大」の音楽シーズンの

南インド古典音楽の中心地チェンナイ。ここでは、シーズン中、一日に四〇以上の公演が開かれ、その規模はインド最大だ。成立の背景にナシヨナリズムがかかわっていたこのイベントにも、近年はグローバル化の波が押し寄せている。

冬の風物詩

インド南東部にある港町チェンナイ（旧マドラス）は、一九世紀の終わりごろに南インド古典音楽の中心地となり、現在でも数多くの著名演奏家がこの町に住んでいる。一年を通して一流演奏家の音楽を聴くことができるが、毎年一二月になると町全体が音楽で溢れでんばかりの状態になる。インドで最大規模の音楽イベントが開かれるからだ。

南インドの古典音楽の公演は、おもに会員制の音楽協会（サンギータ・サバー）によって企画・運営されており、チェンナイ市内にある五〇ほどの協会が、タミル暦のマルガリ月（二月～一月）に二斉に音楽祭を開くのだ。南インド古典音楽・舞踊の

公演が中心だが、午前中には講演やワークショップなども開かれる。この一大イベントは「音楽シーズン」の名称で親しまれており、まさにチェンナイの冬の風物詩となっている。毎年、二月一日づけの朝刊に音楽祭のプログラムが掲載されるので、その日の朝、鼻肩の演奏家の公演日程をチェックするのはファンにとって大きな楽しみだ。

イギリスに対抗する音楽

音楽シーズンが開かれるマルガリ月は、一年中で一番涼しく過ごしやすい時期である。また、結婚式などおめでたい行事には不向きであると言われていたので、公演の日程が組みやすいという利点もある。しかし、この時期に開催されるようになったのは、そ

れだけが理由ではなかったようだ。

一九二八年にマドラス音楽院（ミュージック・アカデミー）が設立され、その年開かれた音楽祭が、チェンナイの音楽シーズンの始まりだといわれている。一九四七年の独立まで続く植民地時代には、イギリス人たちが毎年クリスマス休暇に合わせてヨーロッパ音楽の演奏会を開いており、同じ時期にインド音楽の演奏会を開くことは、それに対抗する意図があったという。永劫不変のイメージをもつインド音楽も、その成立の背景には、植民地の経験とナシヨナリズムが深く関係しているのだ。

インド最大の音楽イベント

音楽舞踊の専門誌『シュルティ』

グローバル化する音楽シーズン

音楽シーズンを楽しみにしているのは、地元のチェンナイ市民だけではない。遠方からの参加者も年々増加している。ここ二〇年ほどのあいだに、北インドに住む南インド出身者たちに加え、NRI（Non-Resident Indians）とよばれる海外在住のインド系の姿が目立つようになった。海外で南インド音楽や舞踊を学ぶ二世の若者たちが多くなるにつれて、演奏家として公演をおこなうことを希望する者も増加の一途をたどっている。このような国外からの需要に対応するかのようには、一九九〇年代半ばにはおもにNRIの演奏家が出演する音楽祭を開催する協会さえあらわれた。

一昨年、このような協会の役員のお宅を訪ねたことがある。一時間ほどの滞在中に、マレーシア、北米、イギリス、オーストラリアなど世界各地から、問い合わせの電話が次々と入り、チェンナイを中心として音楽のグローバルなネットワークが存在することを実感することができた。

インターネットで学ぶ音楽

昨年のシーズン中に見た演奏会は、音楽のグローバル化がさらに進行することを予想させるに十分だ。舞台

によると、二〇〇五年のシーズン中に開催された公演数は約二五〇〇。会期を二カ月とすると、一日当たり四〇以上の公演が開かれた計算になる。これだけを見ても、いかに莫大なエネルギーが音楽と舞踊に費やされているかがわかるだろう。「公演が多すぎて選ぶのが大変」とこぼすファンもいるが、まさに贅沢な悩みだ。出来るだけ多くの公演を見るために、早朝から晩まで会場のハシゴをするものも多い。大きな会場のわきには簡易食堂（カンティーン）が設けられ、演奏の合間に喫茶や軽食を楽しむことができる。同好の士が見たばかりの公演を肴におしゃべりする姿があちこちで見られる。ここでは、憧れの音楽家にはばったり出会う可能性さえあるのだ。

上がった若い演奏家たちは、全員が北米で生まれ育った南インド系二世たち。驚いたことに、北米各地に住む彼らは、チェンナイに住む同じ師匠からインターネットを使って個別に稽古をつけてもらっている。今回の公演のために来印し、数日前のリハーサルで初めて顔を合わせたそうだ。一般の観客はすくなく聴衆のほとんどは彼らの親戚や友人たちだ。熱心に写真やビデオをとっている者も多い。入場も無料で公演というよりは発表会の雰囲気に近いが、彼らにとっては南インド古典音楽のメッカであるチェンナイの音楽シーズンで演奏したという事実が重要である。このようなNRIの存在は、音楽シーズンに大きな影響を及ぼし始めている。海外での演奏経験をもつ一流演奏家たちのギャラはあがる一方で、諸物価の高騰も手伝って、資金繰りに苦しむ音楽協会は少なくない。「海外の同胞を支援する」「音楽に国境はない」といった音楽協会の公の見解を疑わないにせよ、多額の寄付や謝礼が見込めるNRIに対する期待感が存在することも否定できないだろう。演奏の機会を「買う」NRIの進出は音楽の質の低下につながるという批判は根強いが、彼らの存在はチェンナイの音楽界でも一定の地位を築きつつあるようだ。



北米在住のNRI演奏家たちによるコンサート(2009年)